

日本未来学会 公開シンポジウム記録（要旨）

■テーマ：こころの未来形～21世紀における「共感」と「響存」の可能性

■日時：2016年9月26日（月）13:00～17:00

■会場：築地本願寺

■主催：日本未来学会

■共催：浄土真宗本願寺派総合研究所

■趣旨

20世紀、人間は物質的豊かさを追い求めてきました。21世紀は「こころの時代」ともいわれます。しかし、そのあるべき姿はいまだ暗中模索状態です。

本シンポジウムは、1968年の発足以来、人類と社会の未来にかかわってきた日本未来学会が、人間と人工知能は理解しあえるか？、21世紀における宗教の社会的役割、などの様々の観点から、「こころの未来形」を共に考え、明日へ向けて問題提起しようとして開催されました。

■プログラム

【第Ⅰ部】21世紀における宗教の社会的役割

○発表者

丘山願海（浄土真宗本願寺派総合研究所所長）「響存の原理」



釈迦にとって人間関係はマイナスでしかなかった。「四苦八苦」は人間関係の否定が根底にある。原始仏教＝「永遠の原理」から、大乘仏教＝「他者の発見」「共感の原理」へ。自分にとって都合の悪いものとう向き合うか。「閉じられた自己」から「開かれゆく自己」へ。響存（響き合って存在すること）が大切。（[動画](#)）

稲場圭信（大阪大学大学院人間科学研究科教授）「21世紀の共生学とは」



各地の被災地に入り、被災者支援活動を実践。東日本大震災以降、「思いやり意識」に微妙な変化を感じる。日本人の心性は「無自覚の宗教性」にある。他者との共生とは、人と人だけでなく、死者、自然、モノ、人工物との共生でもある。無自覚の宗教性は、人工知能やロボットに対する親和性が高いのではないか。（[動画](#)）

【第Ⅱ部】人間と人工知能は理解しあえるか？

○発表者

高橋透（早稲田大学文化構想学部教授）「AIはどこへ行くのか」



人間にとって究極の他者とは機械と動物である（デリダ）。プレ・シンギュラリティ時代においては、AIが人間同士をマッチングする、AIと人間のコミュニケーションの2タイプが考えられる。人間を越えたAIは「神的なもの」だとすると、人間は仏にトランスフォームする可能性を秘めているのだろうか。（[動画](#)）

山本弘（SF作家）「SFが描いてきた人工知能」



SF作家の仕事は、未来を予測することではなく、未来について考えるヒントを提供すること。SFでは、コンピュータ、ロボット、インターネット、人工知能などを扱ってきた。鉄腕アトムは悪い心を持たないから「完全ではない」という考えもある。人工知能は人間と違う道を通って進化してもよいのではないか。(動画)

■ 第三部：パネル討論～21世紀における「共感」と「響存」の可能性

○ 指定シンポジスト (動画)

市原えつこ (アーティスト)



最近、祖母を亡くして、葬儀システムの優秀さを認識した。人工知能を搭載したPepperに故人の3D仮面を張り付ける「デジタル・シャーマンプロジェクト」を展開。メモリーは四十九日で消滅するところがミソ。宗教の機能の一部にもっとテクノロジーが取り込めるはずである。

佐野ハナ (一般社団法人お寺の未来)



神谷町の光明寺で、オープンテラス、音楽イベントたそがれ、未来の住職塾などが展開されている。「お寺おやつくらぶ」では、お供えの菓子類を恵まれない子どもたちに配布している。

このあと、パネル討論にむけて、和田雄志(日本未来学会常任理事)から、AIBOと暮らすお一人様女性動画、本人の死後も稼働するSNS、ポケモンGOと寺院、リアル世界とバーチャル世界が交差する空間としての寺の可能性に言及。

○ パネル討論 (動画)



その後、登壇者全員により、人間とAIの違いは何か、今後とも人間の聖職者が生き残ることはできるか、人工知能は悟れるのか、利他主義の原点は何か、といった議論が交わされた。